昨日の會

井伏鱒二

新潮社版

Printed in Japan ©

隨筆集　昨日の會

定價四〇〇圓

昭和三十六年二月六日印刷
昭和三十六年二月十日發行

著者　井伏鱒二
發行者　佐藤亮一
印刷者　高橋武夫
發行所　株式會社　新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(341)七一一一(九)振替東京八〇八
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本所
(落丁、亂丁本はお取替えいたします)

昨日の會　目次

昨日の會　七
おふくろ　二〇
琴の記　三三
日曜畫家　四四
艶書　五三
蜜蜂塚　六五
七月二十三日記　七〇
猫　七九
四月二日記　九三
金谷完治　九六

——九月十九日記——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

梅干　一〇四
大三島　一〇八
いろいろ艸紙　一一四
コンプラ醤油瓶　一二四
机上風景　一二六
——質問に答へて——
かみなり　一三二
螢の季節　一三六
御高評　一四二
ハイカラ釣のこと　一五一
谷津　一五四

湯西川　一五八
葦平さんの河童圖　一六四
博多で逢つた葦平さん　一六八
め組の半鐘　一七二
病中雜記　一八〇
にほひ　一八七
昭南日記　一九三
後記　二一九

裝幀　吉岡堅二

隨筆　昨日の會

昨日の會

戰後、ずつと十何年、年ごとに月日が早く經ちすぎたと思ふ。戰前もさうであつた。戰後はことに早く經ちすぎる。歳月の流れにブレーキをかけたらどうか、といふのが私の持論である。ゴー・ストップの信號で何とかしたらどうか。月日が早く經つから物ごとを早く忘れるのだ。

昨晩、中山善三郎さんを圍む會が新丸ビルの地階ホールであつた。中山氏は最近まで新聞社の週刊誌の編輯長と出版局長を兼ねてゐたが、定年で他の職につくことになつたので、友人たちが集まつて今までの勞をねぎらひ、同時に今後を勵まさうといふ目的の會であつた。私は出がけに來客があつて、六時から八時までの會だが定刻に一時間四十分おくれて出席した。もう卓上演說も主賓の挨拶も終り、會の雰圍氣としては、ちやうど良いところが下げ潮になりかけてゐた。腰をかけてる人も

あるし、立ち話をしてゐる人もあつた。もう歸つて行く人もぽつぽつゐた。

主賓の中山善三郎の略稱は「中善さん」である。同じ社の人たちもさう呼んでゐる。

「今晩は、中善さん。遲くなつて相すみません。」

私が名簿に署名して中善さんと挨拶してゐると、劇作家の佐丸叟助君（假名）がウキスキーのコップを私のところに持つて來て「遲かつたですね。さあ、ハイボール。」と云つた。すると後ろで「おい、遲いぞ。」と云ふものがゐた。見ると、三年前に中共から歸還して、そのときはチョビ髭を生やしてゐたが、今は剃り落してゐる平野零兒であつた。いろんな知り顏が見えた。いつもにこにこしてゐる源氏鷄太氏もゐた。醉ふと元氣な話し方をする背の高い劇作家の八木隆一郎もゐた。ベレー帽をかぶつた横山隆一もゐた。この會の發起人の一人である文藝春秋新社の池島信平もゐた。中善さんを會長に頂く釣の會「ざこ倶樂部」の會員である作家の丸岡明、寺崎浩、漫畫家の那須良輔もゐた。その他、紀伊國屋書店社長の田邊茂一、女優、新聞社の人、雜誌社の人などいろんな職業の人がどつさりゐた。こんなに人が多け

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れば多いほど、あつちを向いたりこつちを向いたりする率が殖えるので、お互にゆつくり話を交す率が減つて來る。しかし確かに雰圍氣は出る。

私は佐丸叟助と小說脚色のことで個人的な用談があつたので立ち話をつづけてゐた。佐丸君は三十年あまり前に、彼がまだ學生だつたころ、私に脚本の習作を讀ませるため原稿を持つて來た。その後、佐丸君が學校を出て、私がその脚本の習作を三篇、新潮編輯者の楢崎君のところに持つて行くと、楢崎君はそれを新宿ムーラン・ルージュの劇場主に取次いでくれた。どんな作品であつたか忘れたが、劇場主は激賞して三つとも舞臺にかけ、改めて佐丸君を座附作者として招聘した。そこで佐丸君の劇作生活が始まつた。當時、この劇場では殆ど絶えず佐丸君の作品が上演され、ことに青年層の觀客に喜ばれてゐた。毎日、つづけて見に來る青年や娘さんがゐるといふ噂も聞いた。語弊があるかもしれないが、佐丸叟助はファンをたくさん持つ人氣作者になつてゐた。

その一例として、私はこんな話を人から聞かされた。佐丸君の芝居の一つに、こんなのがあつた。戀に身を燒く一人の娘さんが、夜のしらじら明けに井ノ頭の池の

ほとりに立つて、睡蓮の花が開く瞬間、手を三度たたく。すると、その娘さんの思ひが相手の男の心に沁みこんで行く。その芝居が上演された當座、井ノ頭池のほとりには、夜明け前に睡蓮の花が開くのを待つ娘さんの姿が、そこかしこに見受けられたといふ話であつた。

當時、佐丸君は私には何も彼も隠してゐたが、青年子女からずゐぶん讃仰の手紙をもらつた形跡がある。そればかりでなく、新宿のその劇場に所屬する若い女優からも憎からず思はれてゐた形跡がある。これも佐丸君はいつさい私に云はないが、あるとき佐丸君のお母さんが改まつた風でやつて來て、私と私の家内にかう云つた。

「實は、今日は折入つてお願ひに參りました。何度も躊躇してから思ひきつて伺ひました。わたくしも迂闊でございましたけれど、叟助さんに悪い蟲がつきさうなんでございます。わたくしは心配で夜も眠れませぬ。つきましては、叟助さんに意見して頂きたくつて、はづかしながらお願ひに參りました。」

佐丸君のお母さんは古風で物堅い人だから、舊式な家長制度か何かを遵奉してゐ

たのだらうか。長男である佐丸叟助のことを叟助さんと云つてゐた。佐丸君のお父さんが亡くなつたので、佐丸君が學校を出るとお母さんは長女と次男と共に田舍から出て、久しぶりに一家そろつたばかりのところであつた。しかし長女といふのはまだ尋常小學生で、次男もまだ二十歳前後であつた。廣い東京に知人もなく、氣苦勞もたいていなことではなかつたらう。そこへ持つて來て、叟助さんが一家の家長として、ちやんとするのもこれからだといふ矢さき、悪い蟲と懇ろにならうとする。今までは女性ファンから手紙が來ると、念入りに目を通した後で紙屑籠に入れてゐたが、このごろはざつと見るだけで引裂いて棄てるやうになつた。お母さんの見たところ、その樣子だけからしても、叟助さんは悪い蟲によほど打ちこんでゐるらしい。不斷は親孝行の叟助さんであるが、今度ばかりはどうあつても頑として、人の云ふことを聞かうとしないばかりでなく、家出もしかねない有樣だ。

「その蟲といふのが、あなた、堅氣の娘ならともかくも、新宿のあの劇場の女優でございます。日山淳子（假名）といふ女優でございます。」

そこで私の家内が云つた。

「日山淳子なら藝熱心な眞面目な女優さんでせう。でも、年は幾つですかしら。」
「いえ、年なんかどうだつて。とにかく、困ります。あなた、女優でございますもの。叟助さんに意見をお願ひいたします。」
お母さんは、きつとして私の家内を見た。
相手が女優といふ職業の女だから、倅との結婚を許さない。絶對に反對だといふのが、お母さんの一徹な主張だとわかつた。
「では、僕が佐丸君に意見します。お母さんの氣持をよく佐丸君に傳へて、僕の氣持もしつかり話します。御安心ください。僕は決して安請合に請合つたんぢやないんです。」
私はお母さんにさう云つて、その翌日、佐丸君の出勤してゐるムーラン・ルージュへ出かけて行つた。そこの事務所の人は私を薄暗い舞臺裏に連れて行き、そこから梯子のやうな造りの階段をのぼつて、頭のつかへさうな低天井の部屋に案内してくれた。私が劇場の作者部屋なるものを見たのは、それが初めてであつた。佐丸君は主任の座附作者と二人の同僚を私に紹介し、ここに訪ねて來る者はみんなサインす

ることになつてゐると云つて、サイン帳を出して私に署名させた。めくつて見ると吉行エイスケとか楢崎勤とか、私の知つてゐる人の名前が見つかつた。

作者部屋と云つても、書棚も花瓶もない殺風景な部屋である。佐丸君が今日はもう用事がすんだと云つたので、阿佐ヶ谷まで一緒に歸つて、ピノチオといふ店でビールを飲みながら私は大事なことを手短かに云つた。尤も、私は人に意見する資格はないのである。

「昨日、君のお母さんから、君に意見してくれと頼まれた。どんな話の内容か云はなくつても君にはわかつてるだらう。しかし君、女優だらうが誰だらうが、かまはないぢやないか。大いにやりたまへ。大いにやることだ。親孝行は後まはしにすることだね。」

さう云つて、佐丸君の顔をうかがふと、

「いろいろ御心配かけてすみません。」

と云つた。

お母さんは私を恨んだことだらう。その後の佐丸君と日山淳子とのいきさつは知

らないが、その翌年か翌々年、彼は日本銀行の辻斧太郎といふ課長さんの媒妁で他の女性と結婚した。やはりその銀行家がピノチオの御常連であつた關係で、よく見かける人氣作者の佐丸君のおつとりした人柄に打ちこんで、自分の目がねに適つた堅氣の娘さんを世話したものである。それが約二十七八年前のことになる。

私はその後の日山淳子の噂は割合に知つてゐる。ムーラン・ルージュの所屬を離れて映畫の方に轉向し、年ごとに藝がめきめき上達したといふ評判であつた。また戰後には、地味な役を受持つた映畫で女優としての演技賞を獲得した。その祝賀會に私も案内を受けたので出かけて行つた。行く途中、銀座の表通りで佐丸叟助に逢つた。

「おや、君も日山さんの祝賀會に出るのかね。」と思はず云つた。「僕もこれから行くところだ。」

「いえ、僕は。」

佐丸君は私と竝んで歩きながら、

「友人の作つた芝居を見に行くところです。しかし何ですね、日山さんもずゐぶん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com